

家庭教育力の強化を図ろう

～親の育ち 親としての在り方を考える～

豊田市立寿恵野小学校 P T A

1 学区及び学校の概要

本校は、豊田市南西部、矢作川の右岸に位置し、明治6年、第2大学区7中学区第14小学鴛鴦学校（遍照寺）として創立発足され、令和5年に創立150周年を迎えた。田畑に囲まれ、自然に恵まれた学区であると同時に、国道248号線に隣接し、近くに伊勢湾岸道も通っている。本校には平成12年に、地域の方々の支援で造成された自慢のビオトープがある。ビオトープは、総合的な学習の時間や生活科の学習における教材として児童の学習を支えている。

2 研究のねらい

子どもたちの健やかな成長のために、まず私たち親自身が親としての成長をすることが重要ではないかと考えた。

3 研究の仮説

親が親であることを学ぶことで、子どもたち、さらに家庭により影響を与えることができる。また、親自身もそのありかたを学ぶことで前向きになるのではないかと考える。

4 研究の方法

講師に子育てネットワーク西三河代表の鈴木八千代先生をお招きし、親の学び講座「我が子のことを知っていますか？」～ご自身の5、6年生の頃を思い出してください～という演目で3～4人のグループワーク形式で講演を行い、終了後にアンケートを実施した。

5 研究の実践

(1) 褒められた体験を思い出してみる

どんな褒められ方がうれしかったか、子どもころ努力していた事、褒められたことがあるかをグループで話し合い意見を出しあった。「家のお手伝いをして褒められた」、「頑張って勉強をしていたことを褒められた」など意見が出た。しかし実際に思い出すと、どんなことで褒められたかすぐに思い出せる人はかなり少なかった。

(2) どんなことで叱られたか思い出してみる

そのときどんな気持ちだったかを思い出して話し合った。「勉強をしなくて怒られた」、「けんかをして怒られた」など意見が出て、その当時の思いを各自思い出しながら楽しく話し合った。

(3) 鈴木先生のお話

褒め方、叱り方にマニュアルはなく、正解はない。その家庭によるものである。ただ叱り方のポイントとしては、昔のことを思い出してねちねちと怒らないようにしたい。大事なことは、そ

の方法ではなく自分の子どもをきちんと観察、見つめることが大事なことである。鈴木先生のお知り合いの保護司の方も、対象者に対して耳を傾けることの大事さを伝えてくれたという。自分の子どもの味方は常に親であり、いいわけをきちんと聞くことが大事である。そして、信じることが重要である。

高学年は、なかなか話さなくなる時期ではあるが、本来一番話を聞いてほしいときである。子どもの付き合いも親が思っているより幅広くなる時期である。トラブルも多くなるが、そのトラブルの中で育ち、逃げ方も覚えるようになってくる。そこをどうするかではなく、きちんと観察、見つめるのが親の役割である。

自分が褒められたことをあまり覚えてないという保護者も多かったが、記憶として残り始める時期がこの高学年である。

子どもへの毎日の質問で「今日良いことあった?」「今日良いことした?」と質問をし続けることで、子どもは自然と良いことを探す子になる。

(4) アンケートの実施

17名の保護者が参加し、満足・やや満足・普通・やや不満・不満で記入してもらい、15名が満足、2名がやや満足という結果になった。

自由回答の結果は以下の通りである。

- ・子どもの叱り方の話でしたが、親のあり方も考えることができた。まさに「親の育ち」だった。
- ・本質として自分の子どもをきちんと見るというところを顧みることができた。褒め方叱り方にマニュアルはない。
- ・今日帰ったら、我が子を見て、我が子の良いところをたくさん見つけたい。
- ・子どもの視点で考える大切さを実感することができた。
- ・その時代に合わせた子育てを教えてもらって良かった。

さらに、学んでみたいテーマとして、不登校について、反抗期、いらいらしている子どもへの対応などがあった。

6 研究の考察

実際に親としての立場ではなく、子どもの頃にいったん思いを戻すことで、子どもの気持ちを考えながら親の在り方を考えることができた。わかってはいるものの、自分の子どもをしっかりみつめるということができていない親が多くいること、またきちんと見てあげないといけないと気づけた親が多かった。またグループワークで、親同士が同じ悩みについて話し合うことで、気持ちが楽になったこともあった。今回の講演で、親として育つことができ、家庭でも実践しようと思える方がほとんどであった。

7 成果と今後の課題

ただ話を聞くだけではなくグループワークをすることで、参加者たちがより積極的に参加できた。少人数であることで、より深く学べることができたのは確かだが、より多くの人に知ってもらいたいものでもある。さらに参加人数を増やして、PTAの講演を知ってもらえる努力をしたい。